

空の色

午後一杯吹きまくった西風にすっかり吹き払われたかのように、雲一つない青空が寒々と夕焼に色づき始めていた。暮れなずむ畑中の道を、私はことし九歳のY子と手をつないで歩いていた。

「クボちゃん、何見てんの」

「うん、空だよ」

「アタイね、空ってキライよ」

「どうして？」

「だって、いくら描いても、あの色出ないんだもん」

(一九五七・一一)